

## 第25回 A 地区仮設住宅訪問記録 平成 24 年 3 月 13 日

訪問者: 松下、生活支援アドバイザー、児相相談員、地方紙記者(記録:LLP まち・コミ友田)

去る 2 月 23 日に I 地区仮設住宅住民 7 名とともに、福島県いわき市の仮設住宅を訪れたことは、I 地区仮設住宅住民にとって大きな自信を取り戻すことになった。

ときは、あの 3 月 11 日の大震災から間もなく一周年を迎える時期にあたり、犠牲になられた方々を追悼する式典の準備が進められ、マスコミ各社も特集番組の製作に取材活動が盛んな時期であった。そんな中で、森と松下の一年にわたる継続的な活動と地区の仮設住宅の皆さんのボランティア活動＝「被災者による被災地支援」が、大変な話題として取り上げられることとなった。

3 月 1 日には、地方紙の新聞記者が「あすへ歩む～大震災ちば 1 年～」の取材に大学を訪れた。また、3 月 9 日と 11 日には、千葉テレビでいわき市仮設住宅でのボランティア活動の様子が放映され、「シスターズ&ボーイズ」の自信に充ち溢れる言動と、森が発する深い人間愛に裏づけされた言葉は、この活動を一層価値あるものとして当事者である私たちに、番組をとおして送り返されてきた。

そして、震災から 1 年にあたる 3 月 11 日（日）に行われた「東日本大震災合同追悼式」で、私たちの活動の常連参加者である M さんは遺族代表として、堂々と「お別れの言葉」を述べた。震災当日を振り返り「生きたくても生きられなかった人、その思いは残された家族よりも悔しいに違いありません」と、夫の無念を思いやり、「地域の人々の優しさを糧にあなたの人生も抱えながら生きていきます。天国から私たちを見守ってください」と結んだ。

昨年 6 月、初めてお会いした時の M さんは、生きる目的をつかめずにいた。しかし今、M さんはしっかりと前を見て歩み始めている。それは M さんだけではない。いわきのボランティアに参加してくれた「シスターズ&ボーイズ」の皆がそうだ。「人間ってすごい」と思わずにはいられない。



さて、3 月 13 日の A 地区仮設住宅訪問は、学生は介護実習中や春休みで故郷に帰っているた

め参加がなく、森と友田も友田が主宰する LLP まち・コミ研究会の研究成果報告「ハイライフセミナー」のため、松下の単独訪問となった。

少し早目に仮設集会所に着くと、そこには児相の T 相談員と T さんの孫の K 君に馬乗りされた地方紙の T 記者がいた。T 記者は、先日の大学でのインタビューから、実際の活動の様子を自分の目で見たいと訪れていた。

いつものように、材料などを車から下ろしたあと、松下は声かけに廻った。絵手紙の時に立ち上がって、けん玉をした I さん（男性）のところは鍵がかかっている。その隣の I さんは、暮れに引っ越した新居の生活が落ち着いたのか、訪れている様子もない。その先の E さん（隣りに娘さん家族が越してきた）は、「今ね、家の建築の打ち合わせ中なのよ」と、うれしそうな表情で参加できない理由を語る。家の建築が始まるらしい。

一通り 50 戸に声かけして、常連の H さんとともに集会所に戻ると、参加者は K 君と T 記者を含めて五人になったので、バンダナの巾着袋作りを始めることにした。それぞれに好きな柄を選んでもらっていると、そこへ I さんと T さん母娘がみえ、M 生活支援アドバイザーも戻ってきて総勢 10 名になり、集会所は満杯状態になった。

初参加の T 記者も松下に勧められるまま、糸と針を持った。小学校以来という。一センチメートルもある大きな針目で、黙々と作っている。取材は大丈夫なのかと心配になるが、言葉ではなく、場の空気を共有してもらうことの方が分かってもらえる気がした。

いつものように、T さんは仕上がりが早い。H さんも、いつものように作ることに参加はしないが、皆の作る様子を眺めては「いいねえ」「早いねえ」などと、参加者のモチベーションを引き上げてくれる役を担っている。

けん玉の I さんのことが気になったので、様子を聞いてみた。最近、A 地区仮設住宅の住民の一人が体調不良になり、自ら救急車を呼んで入院したということがあったという。そのため、毎日訪れていた I さんの娘さんが心配して自宅に連れていったのではないかとということであったが、確かなことはわからない。

比較的温かい房総でも、今年の冬は例年になく寒い。梅も 3 月に入ってようやく咲き始めたところである。仮設住宅の生活は、外からの想像以上に厳しいものであったのだろう。

松下は考える。「手づくりあそびの会」の活動は、それなりに定着し成果も上げていると思うが、生活支援アドバイザー等ともっと連携できるのではないかと、もっと連携しなければもったいない。A 地区と I 地区とでも異なるが、これまでのかかわりを振り返り、これからのかかわりを森や学生たちとともに再考したいと。

完成した巾着袋は色とりどり。いつものように、長テーブルの上に並べて鑑賞した後、茶話会を始める。今日のお茶うけは、セロリ・大根・人参・きゅうりの中華風三杯酢の漬物。「私は、塩分を控えているから漬物は食べない」と言っていた I さんも、皆の「うまい、うまい」という声につられて、一口。「あら、しょっぱくないわね」と、口に運ぶ。T 記者もお茶を飲みながら、話に加わる。T 記者に参加の感想を聞かれた I さんは、「ものをつくることは楽しいし、実用的

なものをやってくれるから、本当に役立つのよ」と答えている。「ところで先生、次、何やるのかしら、やっぱり実用的なものがいいわ」と言う。I 地区で評判が良かったことや材料のストックがあることから、ドレスタオルを提案すると、今回はドレスタオルに即決した。

今回の予定も確認し、作った巾着袋を持って、それぞれ我が家へ帰って行った。

だいぶ日が伸びて、17 時を過ぎてもまだ外は明るい。田んぼ中の道を走って、I 地区仮設住宅に向かう。今回のチラシのポスティングである。

今回は一人なので、明るいうちにネット裏の単身高齢者エリアに向かう。N さんや M さんが外で立ち話をしていた。いわきのボランティアのお礼を伝えると、「テレビを観た」と口々に言い「また、協力しますよ」と、疲れもなく元気そうな様子にホッとした。そのあと、追悼式で立派に「お別れの言葉」を述べた M さんに声かけすると、それを掲載した各社の新聞記事のコピーを 5 枚もくれた。大きな達成感になったようだ。九一歳の K さんも元気そうであった。

ネット裏から世帯用の仮設住宅の方に足を進めると、空きの戸数が増えている。120 戸余の中で、明らかに空いていると思われるところが 20 戸程あった。プラスに考えれば、少しずつ住まいも整い、普段の生活に戻れているのかもしれない。それに比べれば、やはりネット裏の単身高齢者エリアの人の動きは少ない。

「あと 1 年」というが、1 年はあつという間に過ぎてしまう。これからは、仮設住宅後の生活を視野に入れた支援を、「してもらう人」ではなく「する人」になった I 地区の「シスターズ & ボーイズ」とともに、考えていきたいと思う。

翌日の 3 月 14 日（水）、いわきのボランティアに同行取材した千葉テレビの夜のニュース番組中の「NEWS な言葉～被災地の心のケア～」に、松下が出演することになった。

I 地区でのお正月飾りの製作の様子やいわきのボランティアの様子の映像も含めて、「心のケアについて、活動の趣旨やこれからについて、5 分で語ってください」というものだ。夕刻、テレビ局でアナウンサーと一緒に読み合わせてみると、長すぎて大幅にカットになった。21 時になり、スタジオリハーサルという段取りで椅子に座ったとたん、大きな揺れが起こった。千葉県東方沖が震源の強い地震であった。銚子市震度五強、旭市震度五弱が報じられたが、幸い津波等の大きな被害はなく安堵した。しかし、刻々と本番の時間が近づき、押し出されるようにしてスタジオの椅子に座り、緊張の六分を終えた。

画面を彩ったのは、5 つのポンポン人形であった。